





図2 シバ材となるコバノミツバツジ

れた東寺以北の京都盆地の4分の1ほどであって、それ以外は洛中の暮らしを支える農耕の場、薪炭供給の場としての洛外の集落が盆地の縁辺部を取り巻き、洛中一都市と洛外一農村が一体的なシステムとなって、千年の変わらぬ歳月を送ることのできる暮らしの形があったことを物語る(図1)。

この洛外の集落は大きなまとまりのあるところを取り上げるだけで悠に10を超えるが、これらは機能別に分類できる。つまり、①稲作型集落、②畑作・シバ材生産型集落、③林産物(薪炭材・木材またはシバ材)生産型集落である。

この3つの農村集落を概括する前に、新しい用語=シバ材を説明しておかねばならない。

### 上方のシバ材利用

山といえば、どこでも人が望む樹種を生産できるわけではない。ナラ類であるコナラや、以前は盛んに植林されたスギやヒノキは、わが国においても奇跡的に広い範囲で植栽が可能な樹種であるが、これらといえども放置しておけば、本来天然で分布する場所ではか夭寿を全うできない。短い期間で商業ルートに乗せようという人間側の算段とうまくマッチングしていたからこそ、至るところでこの3樹種をみるに至った。

つのみであって、残る場をツツジ科の低木が占めていることがかつては多かった。

このツツジ科の低木は株立ちとなったうちの2mほどの枝を地際で採取する。すると、7、8年で元の姿に戻る。しかも、燃料として用いると火付きが早く、火力も強い。これをシバと呼ぶ。

大原女、白川女と呼ばれる女性たちが頭にシバ材の束を乗せて、市内を売りに来たことは今では記録上ではか思い出せなくなっているが、洛中での火付け材、炊飯用材としては人気のあった燃料材である。

京都の春は、このツツジ科の一種、コバノミツバツジの一斉に咲き揃った花の景色で始まった(図2)。

ナラ材(ブナ科樹種材)ばかりを用いる江戸の文化に対して、京都では古くからこのシバ材とナラ類の薪炭材とを組み合わせた燃料

それでもこの3種でさえうまく育たない場所がある。土が浅く、石ころや粘土質で、乾燥しやすい凸型の地形に多い。ここでは、木材にでもできる大きな木といえば所々にアカマツが育

を用いてきた。付け加えると、もうひとつ、材質が緻密なりョウブ、ヤブツバキの2樹種は炭に焼くと火持ちがよく、お茶席などの特別な場で重宝され、現在でも地形を選んで点々とリョウブ林、ツバキ林が残るが、いずれも鹿の食害によって衰退が激しい。これらはシバ材とは呼ばれず、薪炭材に含む。話は飛ぶが、紀州や九州などで生産されてきた備長炭となるウバメガシは京都よりもはるばる遠い江戸に運ばれ、高級炭としてもはやされた。

### 稲作、畑作の洛外集落

さて、元に戻る。稲作型集落は、<sup>うずまさ</sup>賀茂、太秦、桂、深草といった低湿地地形を基盤とする弥生期以来の集落がこれに相当し、古くは秦氏、賀茂氏などを祖先とする人々がいまなお多くここには暮らす。この稲作民は独自の森の文化を育むことなく、山は自家消費の燃料材とともに、木肥、草肥と呼ばれる田畑に鋤込む採肥の場として経営されることがあった。明治期の帝国陸軍陸地測量部作成の土地利用図を基に、薪炭材に乏

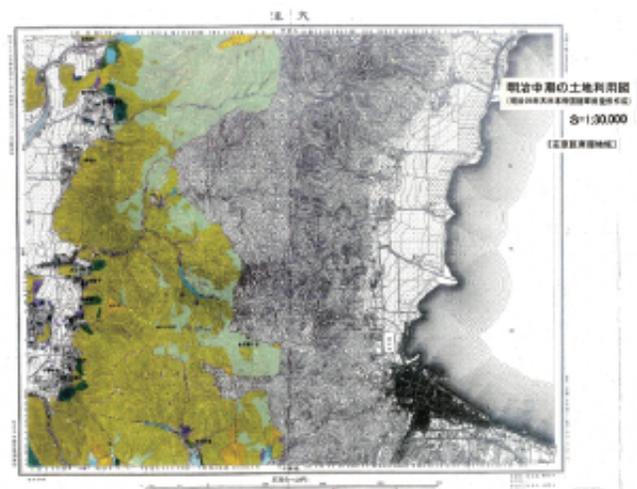


図3 東山(大文字山周辺)の土地利用(帝国陸軍陸地測量部、明治22年作成)

図に示されている色は、  
黄色:裸地(中央やや左下の小さな三角が大文字で、その面積は限られている)

薄い緑色:「松林小」とされているシバ山(シバ材採取林)

黄土色:「松林大」とされているシバ山(ただし、ここには粗放的な薪炭林(コナラ林)を含んでいたと考えられる)

濃い緑色:スギまたはヒノキの植林地



図4 鞍馬の火祭(提供:京都市)

しい現状の植生を検討するとこのことが推察される(図3)。ただし、洛外の農村集落で用いる肥料の主力はあくまでも都から大量に排出される人糞を回収し、糞肥として用いられる仕組みがあって、これらは1960年代のはじめまで続いてきたことには留意しておきたい。

畑作・シバ材生産型集落とは、大原、静原、上高野、白川、一乗寺、浄土寺、大原野などの旧集落を指す。これらの集落の多くは緩やかな傾斜をもつ扇状地であって、縄文期の遺跡がしばしば発見される。北白川や大原などの集落後背の山々は、地質的には硬い岩盤質のチャートや貧栄養で知られる花崗岩を基盤に持ち、山腹上部ではシバ材となるツツジ科低木の好む立地がある。それぞれの集落は山から流れ出る花崗岩やチャートからなる扇状地に展開していることもひとつの特徴である。扇状地は水で運ばれた土壌から成っており、水はけのよい礫質あるいは砂質の土壌が多く含まれることから、水田工作に適さない。そこではいきおい生産性の低い畑作に依存しなければならず、畑作を行いつつ、山腹下部には薪炭材の商業的生産を行い、山腹上部では、シバ材の商業的生産に向かう農林兼業型集落を形成してきた

歴史がある。いずれにせよ、この畑作・シバ材生産型集落——農林兼業型集落の所在地が縄文時代の遺跡群と重なることが多いことは、逆に弥生期稲作民の最初の居住地であったとされる賀茂、太秦などの稲作型農村とは重なることがないことを示しており興味深い<sup>1)</sup>。

### 山棲みの集落

林産物生産型集落とは自家用の農作物の生産はさておき、商業的な生産の大部分を材や薪炭材などの林産物に委ねる生活様式をとってきた集落であるといえる。このような集落は洛外といえども京都盆地にはなく、主に京都盆地の山懐にあたる北山山中をいくらか入り込んだところにある小盆地や渓谷の河岸段丘面に集落を形成する。つまり、山棲みの集落である。

これに該当する集落のうちの代表的なものに鞍馬がある。鞍馬は由岐神社の大祭である火祭で有名である。この夜に行われる祭りは、観光客の多い夜の9時過ぎ頃までではなく、これを過ぎてからでないと本番ではないと地元の人々という。確かに午後10時近くになると、京都の市街地方向である南のはずれから巨大

な鉾を立てながら人々の集団が由岐神社門前、鞍馬の町並みへと大きな塊となって進んでくる。これに対して、鞍馬の町並み方向では同じく鉾を立てた集団が待ち構える。この大集団どうしがしばらくの間、門前での激しく、しかし、静かなせめぎ合いをつづけ、その結果、両者ともに立てた鉾を収めるという寓話化された歴史の記憶を伝承する(図4)。

これとよく似た実際の構図が鞍馬よりも少し下がった山あいの集落、二ノ瀬に伝わる。二ノ瀬には千年前から2つの主だった家系が存在し、一方は在来の千年以上前からそこで暮らしてきた家系、もう1つは<sup>これたか</sup>惟喬親王の側近が土着したという由来をもつ家系。惟喬親王は千百年前、紀氏の母をもったことによる悲運の皇子で、藤原良房をはじめとする勢力に圧迫されたまま近畿をさまよいついには大原の地で亡くなったという。山棲みの集団にろくろによる木椀製作を伝えたことから木地師の祖ともいわれるこの親王の一統と、これをさらに上回る歴史をつなぐ在来の一族が共存しているというわけである。

この2つの集落以外にも、<sup>たかがみね</sup>鷹峯や花背、中川などの集落には現在も山仕事を生業とする人々がおり、スギ、ヒノキ造林の近代林業の担い手ともなった。

稲作型集落である西賀茂の後背の山々はこの人工林化が徹底的に進んだが、この担い手の大部分が鷹峯から来た林産物生産型集落の人々であった。人工林の価値が失われた現在、新たな森林に関わる技術を求め、そこに生業の基礎を置こうとする人材が、都市近郊にあっても鷹峯や花背、二ノ瀬などにあることは驚くべきことでもある。この伝統は林産物生産型集落にだけあって、同じく山を後背にもつ稲作型、畑作・シバ材生産型集落が所有してきた山林におけるスギやヒノキの人工林は経営意欲が失われ、手入れされることなく放置

されて荒廃しているところも多い。山への思い入れの伝統の違いをそこにみる。

## 都の持続性 —もうひとつの役割

かつて京都という都市にはその存続を長期にわたって許す持続的構造があったことは間違いない。都市の長期にわたる存続にとっては、衣食住を賄う必要な資源があると同時に排泄される負荷を消化できる仕組みがそこになければならない。

負荷という言葉を出すことも憚られるのが、死者の扱いです。死者とは単なる死体という意味だけではなく、死者は崇る。死者を葬り、崇りを鎮めるためには社寺の存在が欠かせない。千二百年の間、京都という都市を維持するためには、これを囲む山々は薪炭材や木材の供給ばかりではなく、葬り、鎮めるための山々が欠かせなかったことは、この山々の山裾にいくつもの社寺が立ち並んでいることからよく分かる。

死者の葬送については、京都では「三野」という言葉を聞く。化野、蓮台野、鳥辺野を指す。これらは葬送の地として名高いが、近傍で稲作が行われてきた化野以外は、必ずしも農耕に適しているとはいえない地でもある。蓮台野には風化したチャートの岩脈が広がり、鳥辺野は鴨川の氾濫を受ける。

真偽は不明であるが、鳥葬が行われたのではないかともいう鳥辺野は鴨川の河原に近いが、死者をそのまま河原に捨て置いたというよりも、公家階級を中心とした人々が火葬を行ってきたことは明らかである。また、何よりも中世から近世にかけて、京都で市中死者の葬送権をもつ犬神人、河原者（坂下者）という、後には穢多と呼ばれた被差別部落民が、死者の少なくとも一部を、社寺の背後にあって、山裾に農村集落をもたない東山の山並みに埋葬したであろうことは、今現在もお山中から

出土する石仏の多さをみても頷ける（図5）。

つまり、山は火葬に供する燃料材を生み出すと同時に、死者そのものを葬る埋め墓であったし、山裾の寺々は、詣り墓としての役割を果たした可能性も高い。

鳥辺野で推論されるこのようなことは化野、蓮台野でも同様であったと考えられる。

ただし、山のどこにでも死者を葬ったかといえ、決してそうではなく、農村集落が入会林として所有する商業的薪炭林やシバ材採取を行うシバ山では行われなかったし、社寺が領地・境内地として有する山においても、厳密に仏の領域と神の領域が区別され、神の領域には埋葬しない大原則が守られてきたことは、近世以前の天台寺門宗園城寺境内山林の土地利用史をみても分かる。

## 森林利用の多様性

このように平安京成立以降から燃料革命以前にかけての京都を取り巻く山々の植生としての用いられ方を全体として整理すると、以下のように類別できるのではないかと考えられる。

- (1) 商業的薪炭林（良材が育つ立地にはとくに商品価値の高いクヌギがみられる）
- (2) 商業的シバ採取林（シバ山：多くの場合、シバ材の上層にはアカマツが高木層を優占するため、見た目にはアカマツ林とされる。ただし、すべてのアカマツ林がシバ採取林ではない）
- (3) 農用林（茅場を含む）
- (4) スギ、ヒノキ植栽林
- (5) 未利用林（一部の限られた神社林＝社叢）



図5 埋め墓から出土した石仏群；清水寺

## (6) 粗放的薪炭林<sup>2)</sup>

われわれ森林、樹木の専門家は、植生の過去の姿やその変遷を推定するとき、その森林を構成する樹種、それぞれの個体の年齢の推定および高さや樹木の形状、密度、分布のあり方などを比較しながら判定する。

たとえば、商業的利用がなされてきたナラ類の薪炭林やツツジ科低木のシバ採取林では、最大限の密度まで利用樹種の個体が粗密のないように一様に分布しており、幹の年齢も一致する。また、根際には繰り返された伐採の幹跡が残っている（図6）。

伐採履歴の有無、頻度などの観点から、林地を上記に挙げた組成や構造などから判定すると、土地利用の(1)～(6)の類別をさらに説明補完できるかもしれない。

① 一度も伐採を経験せず、そこで育つ樹木の寿命（多くの場合、数百年以上）を超える長期間を経た場合→原生林、または原生的環境と呼ばれる。京都のように地形、地質が複雑で森林の成立する気候帯では、構成種は多様で、異齡的な齡集団となる。きわめて限られた神社林、人の立ち入れない急な崖にしか存在しない。

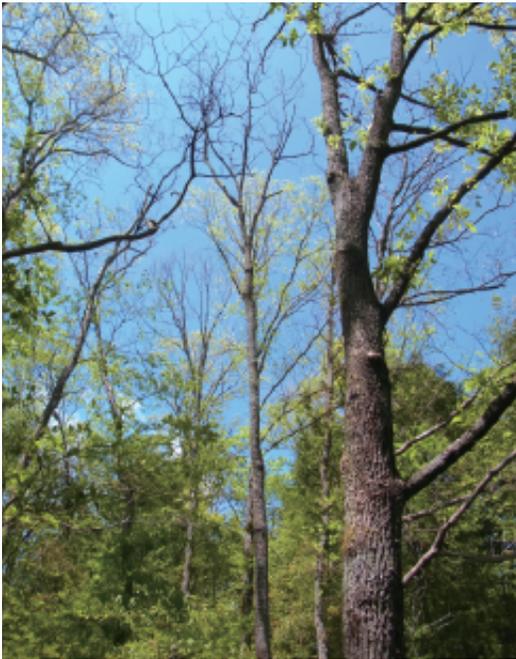


図6 ナラ枯れによって被害を受けているクヌギ林



図7 多様で異齡の集団の奥山の森(上)と、同齡的な薪炭樹種だけの里山の森(下)

② 選択的、局所的に特定サイズ・特定樹種の伐採を不定期に、多くは繰り返し、受けている場合→人の生活圏と離れた森(奥山)のうち、木地師が入っていた森。原生林に近い多様性と異齡的な構造をもつ。

③ ①または②が一度だけ皆伐(森を構成する樹種のうち、価値のある木とその採取の支障となる木のすべて伐採)を受けた後に成立した場合→近代以降の伐採手法であって、多くはチェーンソー(電動ノコギリ)を用いて行われた。構成樹種の多様性は①、②に次いで高いが、伐採後一斉に森林が回復したため、やや同齡的な齡集団となっていることが多い。なお、同齡の森では、樹冠の高さが揃いやすく、林床への光が極端に制限されるため、一般に草本類の出現種数は乏しくなる(図7)。

④ 定期的に伐採を受けている場合

→利用効率を挙げるために、回復速度の早い萌芽性(ひこばえが出やすい)の樹種であるコナラやミズナラなどが用いられる。シバ山では萌芽性のつよいツツジ科の低木類と種子からの発芽力が高く生長にすぐれたアカマツがこれに相当する。集約的に商業利用しているところでは、利用樹種だけを残し、自然に侵入した他の不利用樹種個体を徹底的に排除している。かつて、チェーンソーを用いなかった時代には、伐開の範囲は広大な規模

にはならなかったため、光が差し込む強さの異なる林地が小さなモザイクとなってパッチワークのように変動していた。このため、草本類の多様性はきわめて高かったと考えられる。

⑤ 不定期であるが頻繁に伐採を受けている場合→監視の目の行き届かない道沿いや社寺林などで主として所有者以外によって頻繁に盗採されてきた森や、所有者による採肥として枝葉を得ている低木林などを指す。粗放的薪炭林である。

⑥ ⑤が伐採前の状況に回復するまでに再び、あるいは過剰に伐採を受けて森とは呼べなくなった場合→風化花崗岩を基盤土壌にもっている場所に多くみられるハゲ地、ハゲ山を指す。最近では、増え過ぎた鹿によって、草地群落となり、ついには崩壊を起しハゲ山となったところが増える傾向がある。この場合、風化花崗岩地に限らない。

### まとめに代えて

こういった整理の上で、京都の周りを織り成す三山のありようをみると、日常生活の上で頻繁に必要なとされる薪、炭、シバ材の供給を果たして

きた場、採肥の場があつて、これを支配する集落があり、また一方で死者を葬る場とこれを弔う寺院群と支える集落があり、さらには地主として崇められ、あるいは祟りを鎮める役割を担う神社がある。これらは、それぞれの山の持つ地勢や地形、地質に沿って多様にかつ持続的に経営されてきたであろうことが推察される。これらの点からも、京都にはハゲ山という過剰利用された山がほとんど存在しなかったことは断言できる(図3参照)。

近年、自然エネルギーへの回帰や里山の生物多様性保全を目指すために里山の再利用を図ろうとする意見も目立つ。これにあたっては、地域の地勢、地形・地質・土壌、対象となる生物種の特性の把握などとともに、地域が歩んできた歴史や伝統の中に残されてきた人々の思いの痕跡を見出すこともまた重要であろう。

### 注

1) シバ材は嵩高いまま用いるため、重量単価は高いが、容積単価は安くなり、長距離の運搬には適さないが、洛外の集落ゆへの市中への近さというアドバンテージによって、盛んにシバ材が用いられるようになったともいえる。

2) 粗放的薪炭林とは、自家用に多くは不定期に薪炭材を採取されてきた場合と、監視の目が行き届かない道筋や社寺林などで頻繁に薪炭材が盗採されてきた場合の薪炭林を指す。

### 参考文献

四手井綱英『森林はモリやハヤシではない——私の森林論』、ナカニシヤ出版、2006年。

内山節『「里」という思想』、新潮社、2005年。

川嶋将生『洛中洛外の社会史』、思文閣出版、1999年。

田中和博編(高田研一共著)『古都の森を守り活かす』、京都大学出版会、2008年。

京都市風致保全課『京都市三山森林景観保全再生ガイドライン』2012年。